

急度可申付者也

十一月

〔天保集成絲綸錄九十四〕寛政十一未年四月

一夜蕎麥切は不及申、火を仕込み夜中持歩行候類は、何に不依、前々被仰出候通、一切商ひ致間敷

候○中略

四月

〔貞丈雜記飲食〕一そばきり喰様の事、舊記に見へず、上薦名之記に、そばを女の詞にはあふひと云由みへたり、そばの葉に似たる故也又そばのかゆをそばのかゆとはそうすゝみと云事も見へたり、色うす黒き然ればそばきりも、古ありし物なれども、表向などへ出ざる物故、喰様の法式なども記さるなるべし、

〔昔々物語〕うどん、蕎麥切、七十年以前は、御旗本調て喰事なし、寛文辰年四けんどん蕎麥切といふ物出来て下々買喰、御旗本衆喰人なし、近年は大身歴々にてけんどんを喰ふ、

〔浪花の風〕食物江戸より風味の勝りたるものもあれども、また江戸人の口には適し難く、且適ひ難き計にもあらず、風味の劣りしものも少からず、其内蕎麥切は殊にあしく、其色合もあかみを帯て味ひ宜しからず、只他の加入もの多き故にはあらず、眞の生蕎麥にても、一體の性合よろしからざる故、風味劣れるなり、其上製法もよろしからず、旁江戸人の口には適ひ難し、これ蕎麥は土地の性に應せざる故なるべし、

〔本朝食鑑穀〕蕎麥

發明、世所謂多食蕎麥切、則動風氣、若食蕎麥切而浴湯、必卒中厥倒、或蕎麥性温、多食發癰瘍毒、予意疑之、蕎麥性平而微寒、降氣、寛腸消滯、則希食之、何有動風之理乎、每食之、豈雷動風哉、必損傷腸胃耳、